

## 緊急特別寄稿: 米大統領選挙 第1回大統領候補討論会からハリケーン Sandy まで

熊坂侑三 (APIR リサーチリーダー, ITエコノミーCEO)  
内容に関するお問い合わせは下記まで  
e-mail:kumasaka@iteconomy.com

大統領選挙 (11月6日) を1週間後に控えて、米国はハリケーン Sandy に襲われ、ますます大統領選の行方が分からなくなった。特別寄稿として、第1回大統領討論会からハリケーン Sandy の間に、どのように大統領選の流れが変化したかをみてみよう。

### 1. 「Game Changer となった第1回大統領候補討論会: 単なる Loss ではなく、Devastating Defeat となったオバマ」

10月4日に大統領候補者の第1回目の討論会が行われた。モデレーターは PBS の Jim Lehrer であり、90分にわたり彼は9つのトピックス((1) job growth, (2) the deficit, (3) tax reform, (4) entitlements, (5) health care, (6) federal regulation, (7) the role of government, (8) education, and (9) legislative gridlock) に関する質問を行った。焦点は(1)であり次の4年間でどのように雇用を創出するかであった。特に、第1回目の討論会は重要であり、Carter-Reagan の討論会のようにそれまでの選挙の流れを大きく変える(game changer)こともあるからである。

討論の結果は、全てのトピックスで知識の深さを示した Romney の勝利となり、この討論会が大統領選というゲームの流れを大きく変化させ、彼に勝利へのモーメンタムを形成した。かつて Reagan 知事が Carter 大統領を討論会で負かした時の “There You Go Again” のような決定的な場面は無かったが、自信に満ち、精神的な強さも示した Romney にとって最高の討論会であったといえる。

それまで Obama 陣営の Romney への執拗なネガティブキャンペーンが功を奏して、この討論会前の両者の支持率格差は10ポイント度差が広がるなど、Romney 陣営にとっては最悪のコースをたどっていた。しかし、この討論会の前に、NJ 知事 Christie が “on Thursday morning the entire narrative is going to change” と言っていた通りの結果になった。ネガティブキャンペーンに惑わされていた国民がフィルターのかかっている Romney を初めて見るようになったのである。人々の Romney に対する印象は、“He knows stuff” とか “He has ideas” に変化したと思われる。

Romney はこの討論会のために、十分な準備をし

ていたと思われる。彼の仮想 Obama 役に見立てた討論相手はオハイオ州の共和党上院議員 Rob Portman であった。元副大統領の Cheney は Portman の選択を適切と評価していた。Portman はタフであり、4年前も共和党大統領候補の John McCain のスパーリングパートナーを務めた。その時、McCain の妻 Cindy はその部屋から涙ながらに出て行ったという逸話もある。

George W. Bush 大統領のアドバイザーだった Karl Rove は今回の討論会が Romney には非常に力強い、素晴らしいスタートになったと言っている。Romney のパフォーマンスは保守派の人々の間に enthusiasm をもたらし、彼らを活気付けた。保守派の人々は選挙に勝てると思いはじめたともいえる。Romney は、雇用、国家安全保障、税制改革などの問題に関しても常に forward-looking であり、reasonable、practical であり reassuring であった。このため、終始守勢一辺倒だった Obama とは対照的に Romney は攻勢と守勢の両面を人々に見せつけることができた。討論のトーンは Obama が弱々しく、苛々しているように思われた。Obama は Romney を直視することなく、絶えず looking-down でメモを見ていたのに対して、Romney は議論をする時は Obama を正面から見据え常に looking-up で彼に対峙していた。更に、Romney は大統領に必要なと思われるユーモラスな面も持ち合わせている事を随所で披露していた。

今回の討論会は Obama 陣営にとって完敗となった。多くの民主党議員も Romney の勝利を認めている。Obama の論点がありふれたものであったのも無理もない。何故ならば、Obama が過去3年半の間で何も政策面での成果を挙げておらず、nowhere to go なのだから、魅力ある主張とはならない。この討論会の間、Obama は準備不足が明らかで、退屈そうに見え、あたかも討論会を早く終わらせ、家に帰りたいようにも見えた。(あるコメンテーターは Angry Black とと思われるのを Obama は警戒していたとも言う。)

一方、Romney は明確に自らの大胆なビジョンを熱心に語り、特にそれをマサチューセッツ州で行った超党派合意を实践した経験から、“I will do it again” というセリフは聞いている人々に対して説得力があった。そう思われる背景には、Obama 政権ではかなりの法案が上院の Reid 院内総務の手で議案に掛けられる事がなく審議がストップしている事実がある。

今回の討論会の共和党にとって大きな収穫は、これまでのネガティブキャンペーンにより Obama のフィルターを通して Romney を見ていた人々が、この討論会でフィルターなしの Romney を知り得た

ことであった。このことは、かなりの共和党よりの人々にも言える。この時点で選挙まで1ヶ月程度だが、これまでのキャンペーンがリセットされたと言える。

実際に、Obama のパフォーマンスは非常に失望的なものであり、コメディアン出身のあるポリティカルコメンテーターは、Obama にはテレプロンプターが必要なのではないかとも言っていた。Weekly Standard の Stephen Hayes らは Obama の敗因を、Obama 陣営が Romney からこれほど直接的に各論点に鋭くチャレンジされるとは予想していなかったからではないかと分析している。Obama も準備不足であった。また、リベラルなメディアは Obama に対して寛容であり、プレスコンファレンスもほとんどなし、あっても質問は予め提出されており、Obama はこれまで厳しく政策の不備を追及される事がなかった。

第1回の討論会で完敗した Obama は2回目のタウンホールフォーマットの討論会には非常にアグレッシブに出てくる事が予想される。Obama は“Romney はこの分野では全く経験なし”と 常々揶揄していることから、Obama 側から言えば“Come back next time”ということになるだろう。一方、Romney サイドからは“Be ready”ということだろう。

共和党・民主党ともに、第1回討論会を Romney の勝利、Obama の完敗を認めたとあってよい。Obama の選挙参謀の Axelrod は、Obama は討論会の成果に満足していないと言っていた。しかし、Obama の戦略は最初から Romney との議論には深入りせず、Romney に果敢にアタックさせ、自分を大きく見せようとしていたように思われる。傲慢な彼らしい戦略であった。そんな彼に対して、真摯に質問に対して詳細に答えていた Romney は好感がもたれたし、それが良い戦略でもあった。

Romney が最初の1分間で自分を define し、真正面から Obama に立ち向い、タフでありながらも Obama に対して礼儀正しい態度で彼をしっかりと見据えて、Obama の見解に一つ一つ反論していったことは素晴らしい戦略であった。特に自分の5人の息子の幼少期の話を持ち出し、ユーモラスにオバマを“嘘つき者”と示唆したのは上手い批判の仕方であり、点数を稼いだと言える。(10回嘘をつけばそれが本当になるという諺を思い出した。Obama の根拠のないネガティブキャンペーンの繰り返しへの批判になっていた。)

Obama 陣営からは、何故 Obama が最近の Romney の 47%失言問題(後掲注参照)、ベインキャピタルなどの問題を取り上げなかったのかという意見がでてきた。それどころか討論会では、社会保障問題では Romney に同意し、変化はないとまで

言ってしまうている。民主党サイドにしてみれば、Obama のこれまでの議論が相手側に持ち去られ、Romney の大きな点数稼ぎに加担したのではないかと懸念している。選挙参謀 Axelrod は、“有権者の関心はもっと別の問題にある”ので、Obama はそうしたことに触れなかったのだと弁明している。しかし、Fox News の Charles Krauthammer は次のようにコメントをした。既に Obama にしてみれば、Romney は don't care anybody の人、ベインキャピタルでは情け容赦なく元従業員のワイフキラまでしてのけている。Romney はミドルクラスに増税をすることを考えている等のこれまでの6ヶ月余に渡るネガティブ広告で Romney を十二分に引き離していると考え、Romney に勝つ為に 47%失言やその他のリスクを伴う話題に触れなくとも大丈夫と考えていたからだろう。

Obama 陣営が忘れていた事は、ネガティブ広告は「両刃の剣」でもあるということだ。Romney を初めて討論会の場で見た人々は、これまでの彼のイメージと現実とのギャップを初めて知ったと言える。これまで Obama 陣営のネガティブ広告で培われて来たイメージと現実の Romney が全く違っている事に気付かされたからである。この討論会後では 56%の人が Romney は分別があり、タフだが尊敬に値すると認め、どの世論調査でも Romney に凱歌が上がっている。1.15 億ドルも投じた Obama 陣営のネガティブ広告は無駄になったと言うよりも、ここにきて Romney の評価を上げてしまったようである。

Romney は Obama を選挙の日まで“Trickle-Down Government Guy”と標榜し続ける事が出来れば、勝利を手にする事が出来るかもしれない。民主党陣営が即刻 Obama のプアーパフォーマンスの擁護に乗り出しているのは、どれも馬鹿げて可笑しいが、その中でも最高なのは Al Gore の次のような弁護である。Obama はデンバーに着陸前2時間の睡眠しかとれていなかった。500フィートの高度で体調に異変をきたすのは確かで、その為にディベートが上手くいかなかったと。彼は元副大統領であり、ノーベル平和賞を受賞していることを思えば、この発言には情けなくなる。Watergate スキャンダルで有名になった作家 Woodward の弁護は次のようなものだった。“外交問題で何かが起こったか、または個人生活で何かあったために、Obama 大統領はまいていたのだ。その他は“モデレーター-Lehrer のディベート運営がいけなかった”、“Romney には十分な練習時間があったからだ”、“Romney の税の論点は嘘にまみれている、直ぐに分かる事だ”、“Romney の話には何らの特別なものもなかった”云々と。あまりに馬鹿げた Obama 擁護だが、反対陣営にとって

選挙とはこんなものだろう。

最も印象に残ったのは、バージニア大学の Sabato 教授が“Obama がディベートでの負けは、Not just loss (単なる敗北)と云うようなものではない、Devastating defeat (完敗)だった”と言うコメントである。これは spin doctor (メディア担当アドバイザー)によって簡単に修正できるものではなく、次回の討論会で Obama が完全に勝利を収める以外に対策はないと彼は付加している。次回の討論会での Obama の対応が注目される。これまでの様な、cool guy を装い、いつものような人を見下す態度が出れば準備周到な Romney に再び負ける可能性がある。今回の大統領選挙における最も significant moment であるのは、今回の討論会で Romney が Obama を控えの場所から引き出し、彼がこれまで何も成し遂げてこなかった「裸の王様」であることを示したことにあり、Hayes は指摘している。

(注)47%失言問題とは Romney が非公開の政治資金集めの場で米国民の 47%は政府の援助を受け取る資格があると思っていると発言した。すなわち、彼らは納税もせず、政府に依存するだけの「たかり」のようだと解釈できる発言。

## 2. 「Cranky Old Man vs. Polite Young Man の副大統領候補討論会 (10/11) : Biden should grow up before he gets old」

10月11日に副大統領候補の討論会が行われた。通常副大統領の討論会は大統領選に殆ど影響を与えないことからあまり注目されない。最も良い例は1988年のLloyd BentsenとDan Quayleの討論会であろう。Quayleが彼の41歳の若さをJohn F. Kennedyに例え、同じ経験があると言ったのに対してBentsenが”I served with Jack Kennedy. I knew Jack Kennedy. Jack Kennedy was a friend of mine. Senator, you are no Jack Kennedy.”と答えて、Quayleの立場が全くなかったことは有名な話である。しかし、大統領選挙に勝ったのはGeorge H. W. Bush-Dan Quayleであり、Dukakis-Bentsenは負けた。

しかし、今回の場合は第1回目目の大統領候補討論会においてそれまで優勢であったObamaがあまりにも無残な敗北を帰したことから、今回の副大統領討論会が注目されることになった。すなわち、副大統領候補にはそれぞれ明確なミッションがあった。民主党副大統領候補BidenはObamaが言及しなかった47%失言問題、Romney政権下での5兆ドルの減税などを持ち出し、とにかくObama敗北のブランクを埋め、民主党サイドに流れを引き戻すことにあった。一方、共和党副大統領候補RyanはRomney-Ryanの常識的かつ実践的な政策により、米国経済を立て直し、雇用創出の実現を無党派の有

権者に確信してもらうことにあった。すなわち、今回の副大統領候補の討論会は勝ち負けよりも、次の第2回目の大統領候補討論会に繋げる役目があった。

とはいうものの、メディアはやはり勝ち負けをつけたがるし、その理由付けの中にも今回の副大統領討論会のいろいろな見方が現れてくる。

この討論中にBidenがRyanばかりか司会者のMartha Raddatz (ABC Newsのレポーター)に対してとった傲慢、無礼な態度にその後メディアの議論が集中している。Bidenは何度もRyanの話をつ断させ、また相手を嘲笑し、勝ち誇ったような意味のない笑いをしばしばみせた。時には聞こえる程の嘲りの笑い、その無作法さは討論中続いた。これは2004年の大統領候補討論会でGoreがBushに対して見せた”天井をしばしば見上げ、再三のため息をつく”態度を思い出させた。

もちろん、民主党サイドからみればBidenは議員歴40年のキャリアをもつ69歳の政治家であるから若いRyanに対する余裕・自信の表れと映るだろう。ベテランのpoliticianならばこの程度のことは当たり前と納得できよう。しかし、ベテランのstatesmanのすることではない。neutralなTom Brokaw (NBC night newsのアンカー)、David R. Gergen (CNN政治アナリスト)でさえ、Bidenの態度を非難していた。もっと大人になるべきと。

第2回目の大統領候補討論のObama優勢につなげるためにBidenが攻撃的に出ざるを得ない状況にあったことは理解できる。それ故、この討論会の勝ち負けの見方も様々である。面白い見方をしていたのはCharles Krauthammer(ピューリツァー受賞コラムニスト)であった。彼は「ラジオで聞いていればBidenの勝ち、テレビをみていればRyanの勝ち」とKennedy-Nixonの討論会を思い出すとコメントをしていた。結局、台本を聞いている人々には、攻撃的なBidenが勝ちと思われただろうし、一方TVスクリーンで2人のやり取りを見ていた人々には、BidenのRyanに対するあまりにも失礼な所作、相手の話しの腰を折る態度は敗者の印象を与えたとKrauthammerは述べていた。

Ryanに比べて30歳も年長の、40年余の政治家生活を誇っているBidenは、Ryanをゴールデンタイムの国民議論番組には不慣れな若造と見くびり、彼がイラン問題やその他の重要な問題について議論をしているにも関わらず、Ryanの発言に一々笑ったりしていた。一時はRyanもイラン問題などの重要な問題の時に何故笑えるのかとBidenを問い詰め、常に真摯な態度で討論に臨んでいた。

今回のBidenの態度には多くの批判の声がTwitterでもよせられている。共和党のMike

Huckabee は Biden の態度はマナーを重んじる生活を送っている中西部の人々には全く考えられないことで、それに対して Ryan の冷静な対処、マナーの良さが際立ったと言っている。更に、面白いことに、激烈な選挙区である Swing States では Washington D.C. や NY と異なり、バーで交わされる様なジョークが通じない所であることを、Biden は忘れていてのではないかと言っている。Ryan に関してはクールに Biden の論旨の誤りを指摘し、2 期目の Obama 政権と Romney 政権との違いを明確にし、国民に代替的な選択があることを訴えて好感を持たれたとも言っている。Brit Hume (政治ジャーナリスト) は今回の討論会を Cranky Old Man vs. Polite Young Man (偏屈な老人対行儀よい青年) と上手く一言で捉えている。

Karl Rove (政治コンサルタント、George W. Bush 大統領元次席補佐官) は、Biden はこの討論会を相手不足から真剣に捉えていないように見せていたと言う。Biden が Ryan の言う Kennedy、Reagan、Bush の減税が成長に繋がったというのを、歴史上でそのような例はないと鼻であしらうなどその態度は無礼でつまらないものであった。しかも、Biden の言ったことは、全く間違っていることが討論会後に Chris Wallace (政治ジャーナリスト、現 Fox News のホスト) によって指摘された。

Stephen F. Hayes は Biden は自ら品を落としたが、Ryan は正直で、思慮深く、尊敬できるし、質問には克明に答え、大きな問題に触れる機会は逃さず捉え非常に良かったとコメントをしている。Ryan が副大統領候補に選ばれた時は、彼は外交政策には弱いと思われていたが、最初に出されたリビア問題の質問にも見事に答え、その勉学知識の深さが窺われたとも言っている。

この討論会の勝敗はさほど重要ではない。しかし、民主党サイドには一見 Biden の勝利と見えるかもしれないが、not clear winner と Haynes は見ている。少なくとも Ryan は負けてはいなかった。やはり、今回の討論会での焦点は Biden の態度に集まっている。Chris Wallace は 1960 年以來、大統領候補の討論会をみてきているが、これほど相手に対して大ぴらに無礼で軽蔑的な態度にでた候補者を見たことはないと言っている。彼は議論された問題に関しては Biden と Ryan は同点であったかもしれないが、スタイルの点で Biden に問題があったと指摘している。

Byron York (Washington Examiner のコラムニスト) も Biden の Ryan に対する態度を非常に失礼だと見ている。もちろん、民主党サイドにとっては Biden が passionate fighter であり、Biden が bullish にでたのも当然であるとみることができる。York は討論

の勝ち負けに関しては本質的には差はないと言っている。更に、最も重要な無党派投票者に対しても引き分けと言っている。

討論そのものに関しては、多くのコメンテーターが引き分けと言っているが、ある世論調査は浮動票層にとって、Biden の勝利を 50%、Ryan の勝利を 31%、引き分けを 19% とみている。一方、この討論会直後の調査では Romney が Florida 州で 51 対 44、New Hampshire で 50 対 46 と優位に立ったという結果もある。

オバマの選挙参謀、David Axelrod は、Biden は straight-talk な人であり、ミドルクラスのために戦っている Biden の攻撃的なパフォーマンスを Obama は喜んでるとコメントしている。

今回の討論会で言えるのは、討論者の言動が討論中のごく限られた部分であっても、それが討論会終了後も何度も繰り返して YouTube などでも流されるということである。更に、彼らの言ったことの真偽が即座に調べられ、それも YouTube で流される。すなわち、1 回だけの、見ただけ、聞くだけの討論会であれば、どのような形でも印象に残った方が勝ちとなる。それ故、Biden が示したような無礼で、強引で、(Benghazi 問題、税金問題など) 事実に基づかない反論をする戦い方もある。しかし、細切れに場面を何度も何度も人々が繰り返し見ることによって、その戦い方がマイナスに変化してくるのである。このことは、IT 時代において、Biden ばかりか、全ての、特にパフォーマンス重視の政治家は気をつけなければならない。

### 3. 「第 2 回大統領候補討論会(10/16): 司会者の Candy Crowley に救われたオバマ」

第 2 回目の大統領候補討論会の司会に選ばれた Candy Crowley (CNN のアンカー) は当初から問題視されていた。と言うのは、Romney が副大統領候補として選んだ Ryan Ticket を “Death Wish (死の願望)” と呼んでおり、彼女のリベラルな考え方が Obama に有利と見られていた。実際に、彼女が Romney の話しをさえぎった回数が 28 回に対して、Obama は 9 回と 3 分の 1 以下であった。その結果、90 分の討論において Obama (43 分 57 秒) の方が Romney (40 分 58 秒) より幾分長く話すことができた。

討論会はタウンホールフォーマットであり、まだ Obama、Romney のどちらに投票を決定するかを決めていない 82 人から Crowley が 11 の質問を選らんだ。彼女の質問項目の選び方は中立的と思われた。

討論そのものは、非常に激しいものであり、マイクを片手に睨み合うところをあるコメンテーターは映画の “真昼の決闘” を思い出すと笑っていた。

Charles Krauthammer も、“We (男性全般) love boxing match”, tough fight でマイクが武器のようだと笑っていた。

Romney は前回と同じ姿勢で臨んでいたが、Obama はオーバーヒート気味でも今回の討論会を good night にしなければとの意気込みが感じられた。討論会の結果の方は、Obama サポーターは Obama の勝ちと言ひ、Romney サポーターは Romney 候補の勝ちを主張する具合であった。しかし、共通するのは“完全に我が方が勝った”という言い方ではなかった。全体としては、わずかに Obama が勝ったという見方が一般にとられている。

今回のタイトレースの鍵を握るのは無党派層だが、こちらは相変わらずで、未だ決めかねないでいるといったところか。従って、討論直後の評価では彼らにとってこの討論会は Obama-Romney の引き分けと思われるが、しかし、討論会 2 日目からの事実確認で Romney 有利に傾くであろう。

Romney がよかったのは彼の税制をうまく説明したこと。特にフラットな 25,000 ドルまでの控除に言及したのはよかった。

1. 過去 4 年間の経済指標を持ち出し、オバマ政権下での貧困層の増加、失業率の上昇、フードスタンプ受給者の増加、58 万人の女性がレイオフされていることなどの具体的な説明はよかった。
2. 石油価格の高騰を指摘し、Obama の石油、石炭政策の過ちの指摘もよかった。しかし、この時、Obama が景気刺激策として援助した Solyndra 社、A123System 社などが倒産した例を引き出し、彼のグリーンエネルギー政策の失敗も追及すべきだった。
3. 中国問題を中国の通貨 manipulation と捉えたのは上手かった。

一方、Obama は Romney を選べば、今の混乱をもたらしている Bush 政権に戻ると非難していたが、Romney は Bush 政権と抱えている問題の相違を説き、それに対する具体的な解決策を示唆していた。Obama は大統領職にある事を盾に取っての虚勢で Romney を押さえ込んだイメージが残る。Obama の成功したポイントは Romney を不法移民に冷たい人という印象を周りに持たせたことだろう。総じて、Romney は 'be himself (ありのまま)' で、どう米国の良くなるのかの政策をプロポーズすることに成功したと、スーパーリングパートナーの Rob Portman は言っていた。

今回の討論で問題を残したのは Libya 問題であった。Obama はこの問題で Crowley に救われた。9/11 Benghazi テロ攻撃に関して、その翌日の Rose

Garden において、Benghazi 攻撃がテロによると Obama が言ったかと Romney からの問い詰めがあった。もちろん、Obama はこのことをイスラム教冒涇のビデオのせいにしてテロ攻撃の隠ぺいを 2 週間も試みた事実は誰もが承知である。しかし、Obama は Rose Garden において、Benghazi とは関係なく一般的に “no acts of terror will ever shake the resolve of this great nation.” と言っていた。Obama が Benghazi 攻撃に対して当初からテロと言っていたとの主張（弁解）は、このセンテンスからは “technically correct” といえるものの、“ultimately wrong” であることに間違いはない。Obama が Benghazi 攻撃後 2 週間の間、Benghazi 攻撃を例のビデオのせいにしていたことは、彼の Letterman の TV プログラムでの話、国連での彼の演説でも明らかである。しかし、Crowley が司会者としてすべきではなかったことは、彼女自身の見解を述べ、更に Rose Garden のスピーチで Obama がテロ攻撃と言ったと判断したことである。この司会者の injection で Romney は明確な勝利を逃したと言える。確かに、今回 Crowley によって Obama は助けられたが、逆に第 3 回目の討論会が外交問題であることから、この Benghazi 問題を中心問題にしてしまったことも事実である。

Obama はタウンホールミーティング独特の小さな個別問題で得点を稼いだと言える。一方、Romney は大きな一般問題によって Obama 政権の 4 年間の失敗を糾弾していた。

John Sununu (元共和党上院議員)は、Obama は故意に不正直な返答を繰り返しており、彼は完全に “live in his world” のようだと言っていた。Obama にはこれからの 4 年間のプログラムが見られない一方、Romney は Obama 政権の失敗を追及しながらも、それを change する政策を打ち出している強みがある。

Obama は質問されることが苦手のように思われる。これは、石油価格の高騰、安全保障、中国、雇用問題をもみても、彼は返答にしばしば詰まると “move next” と言いつつ。

Stephen F. Hayes が言うように、今回の Obama-Romney の討論会は good fight と言える。少なくとも、Obama は前回の失敗から立ち直り、印象的なパフォーマンスで民主党ベースをエキサイトさせることに成功した。しかし、これは前回の Obama のパフォーマンスがあまりにも酷かったことから、今回がより良く見えたとも考えられる。しかし、翌日からの事実確認で Obama は再び不利になるだろう。討論会直後の選挙に行くと思われている人の支持率世論調査では、Romney の 50 に対して Obama の 46 となっていた。Obama は aggressive

defender としてはよかったが、結局彼の問題点は次の4年間をどうするかアイデアがなく、Romneyの5ポイントプランを1ポイントプランだと皮肉り、女性雇用に関してRomneyの言った“Binders of full of Women”を曲解し、揶揄するだけである。Obamaが大統領としての器でないことが知れる。

Romney へのネガティブキャンペーンが逆効果となった今、Obamaはstatus quo(現状維持)政策では勝てないのだから、再びどのようにするかと言うChangeの政策を打ち出さなければならない。しかし、時は遅すぎる。

第2回目の討論会のObamaは前回に比べてmuch better performanceであったが、何ら目新しいものがなかった。単なるエンターテインメントならばそれでもよいが、大統領選での勝利を考える時、何か新しいものを出さなければならない。

RomneyはどこまでもObamaの失政を追求すべきだ。Romneyはオバマの政策の誤りを激しく突き、人々を悩ませている経済を立て直すビジョンを展開すべき。今回の討論会でグリーンエネルギー政策、Benghazi問題を有効に使えなかったが、good debateを今回もしたと思われる。しかし、前回の完勝に比べられると、今回のRomneyへの評価がどうしても低くでざるを得ない。

第1、2回の討論会をみて感じたのは、Obamaのネガティブキャンペーン(フィルター)を通してRomneyを見る傾向があったが、彼が大統領として十二分な資格のあることが示されたことだ。また、大統領候補討論会までの現職の圧倒的な有利が、討論会后に逆転する構図はCarter-Reaganの1980年の大統領選挙と似ている。

#### 4. 「第3回大統領候補討論会(10/22): Romneyのモーメンタムを最後までくつがえすことができなかったObama」

第3回目の大統領候補討論会のモデレーターはCBSニュースのベテランBob Lloyd Schiefer。

今回の討論会を前にして、Charles Krauthammerの両者へのアドバイスは次のようなものだった。第1回目の討論会で大勝したRomneyに対しては、モーメンタムが続いているので、今夜の討論会で引き分けにもっていければモーメンタムが継続して大統領選の勝者になれる。一方、Obamaの方は、a wise man of foreign policyとして、Romneyのモーメンタムが失速するように流れを変える必要がある。Chris Wallaceの予測は、Obamaはアグレッシブになるだろう、逆にRomneyはアグレッシブさを抑えるだろうというものだった。また、彼は外交が討論の議題と言うが、外交政策+経済が話題になると言っていた。討論会はまさに、Wallaceの予想

通りになった。

Obamaは果敢に討って出、自らの政権はイラク、アフガン戦争を終結させ、オサマビンラディンの死でアルカイダの息の根を止めることに成功、国際社会の総意を纏めてイランに厳しい制裁を課し、その核開発計画を阻止している。更に、デモクラシーを世界各地に押し広げて、米国は世界の中で一層強い国になっている、とObamaは誇っていた。更に、彼はRomney Ryan ticketを外交には素人の集まり、unknowledgeable, inexperiencedと揶揄し、彼らに任せておくとBush-Cheney時代に戻るぞと脅し、彼独特の横柄な、傲慢な態度でRomneyを攻めていた。これはObamaが現職大統領の特典を有効に使ったともとれる。

Romneyの方は、Obamaの仕掛けるpit bull fightにはのらず、上手くObamaの政策を大方の所で同意をしながら、足りない点を補足・批判する戦略にでた。Romneyがしばしば“I agree with you”と言い、Obamaの外交政策の大筋への同意を示したのは、Romneyが保守からneutralにシフトしているイメージを人々に訴える意図もあったと思う。同時に、外交政策はドラスティックに変えるものではないからRomneyの対応は適切だったと言える。しかし、RomneyはObamaの外交への正確な批判を次のようにしていた；

- Obamaのイランへの制裁は拙速過ぎる、もっと果敢に迅速であるべき。
- 戦争は最後の手段で軽々しく語り、扱うべきものではない(これは女性にうける)。
- 中国との貿易は大事で維持するのは結構、しかしフリーマーケットの原則を破る通貨操作等のcheatingを許しておいてはいけない。
- シリアやイラン、その他中東に対処するにはもっと包括的な戦略とリーダーシップが必要。
- オバマの大統領就任直後の、イスラエルを抜かした中東訪問、カイロススピーチは、米国のリーダーシップのweaknessのもととなった。
- 米国の世界での役割は、独裁に悩む国の人々を自由にすることだ(Osamaがかつてdictateという言葉を使ったことを上手く捉えた批判であり、Obamaは一時speechlessとなった)。
- 強力な米国を取戻すには、強い経済、最強の軍事力が必要(ここで経済を上手く外交と結び付けた)。
- それには超党派の努力が必要であり、“I work with you”と言い、independentに訴えかけていた。

RomneyはObamaがレッテル化するwarmongerの流言を覆した上で、全てのissuesに関して

knowledgeableであることをpresidentialな態度で示した。

この討論会でRomneyはどの課題にも精通し、女性の嫌うwarmongerどころか、立派に大統領職を担える器であることを証明出来た。Stephen F. Hayesなど多くが今回の討論会を引き分けとみているが、Pat Buchanan(保守的政治コメンテーター)はRomneyの勝利と判断している。何故ならば、RomneyはObamaの言うようなwarmongerなどではないことを証明出来たし、Obamaの挑発的な誘いにのらず、逆にRomneyはそれを意識的に避け、笑顔で対応するなど女性票を増やしたと言っている。特に、Romneyの“中国に自由貿易の原則を守らせないといけない”との批判はObamaにとって痛手となった。Romneyは大統領たるべしの目標を達成した。

KrauthammerもRomneyの勝利とみている。この討論会に臨んでRomneyが自ら立てた戦略は、勝敗を引き分けに持込む、戦術としては攻撃モードではなく、穏やかに、具体的に説明をするやり方、小さな問題で点数を稼ぐのではなく、大きな問題で勝つことであった。Romneyはその全てを完遂出来た。

一方、オバマは小問題へのアタックに終始していて、どちらが挑戦者か間違えるところであった、市議会選に立候補した新人が討論に臨んでいるようだったとKrauthammerは言っていた。

今回の討論会は外交がテーマであるのだから、RomneyはやはりObamaのベンガジ領事館アタックのテロ攻撃の隠ぺいをどこまでも責めるべきだった。討論の中で、Romneyが最もよかったのはObamaの大統領就任直後のApology Tourに関して“Mr. President, America has not dictated to other nations, we have freed other nations from dictators.”と言ったことだった。

3回の大統領候補討論会が終わったが、討論会の勝ち負けにはそれぞれ支持する人々のバイアスが入るが、ObamaがRomneyのモーメントを止められなかったことは事実である。Romneyが仮に討論に勝たなかったとしても、失ったポイントはなかった。最も大きな収穫は、討論会を通じて、RomneyがPresidentとして十分な知識と人柄を示したことであった。

一方、最後の討論会において流れを変えられなかったObama陣営は焦っている。投票日の2週間前になって、RomneyのObama政権には2期目のAgendaがないという痛烈な批判に対して、急遽第2期目のビジョンとして、20ページのパンフレット“A plan for jobs and middle class security”を発表した。ここには、全く新しいものはない。また、小事しか語れないObamaはRomneyと“amnesia(健

忘症)”から“Romnesia”の造語を作り出し、Twitterなどでうけている。これはRomneyがかつて約束した超保守的立場を今は忘れていると皮肉っているのである。正直いって、多くの聴衆を前に大事を語らず、“Romnesia”で人を惹きつけているObamaにも、またそれを喜んで支持している聴衆にも違和感を感じる。

現状の大統領選挙人の獲得予想が両者共に269人と同じになるほど接戦となっている。仮にこのことが起これば、下院が大統領を選び、上院が副大統領を選ぶことになる。今の下院・上院における民主党と共和党の勢力関係からするとRomney大統領-Biden副大統領の誕生となってしまう。米国にとって最悪のコンビとなる。

今回の選挙において鍵を握るのは女性票である。避妊問題など社会問題では女性から支持を受けているObamaだが、今では大半の女性が職をもっており、経済が彼女達にとっても重要な問題になっていることを忘れてはならない。2008年にObamaを支持した若者をどれだけ今回Obamaが逃がさないかがある。Obamaが品のない言葉で相手を侮辱したり、“Romnesia”などの造語で訴えるのも若者を意識してのことだろう。Presidencyの品格を貶めているばかりか、しゃにむに何でもありに思える。

ベンガジ領事館のテロ攻撃の隠ぺいは自明だが、Romneyが3回目の討論会の場で言及しなかったのは賢かったと見ることもできる。結局、外交は大統領の職権域であることから、その成否は歴史が証明するからである。

今の段階(10月27日)において、ほぼSwing stateの色分け(赤: 共和党、青: 民主党)も決まってきた。Colorado (9)、Florida (29)、Iowa (6)、Michigan (16)、Nevada (6)、New Hampshire (6)、North Carolina (15)、Ohio (18)、Pennsylvania (20)、Virginia (13) and Wisconsin (10)である。

接戦なのは、Colorado、Ohio、Wisconsinであり、特にWisconsinが最も大きな鍵を握っている。Nebraska(6)とMaine(4)の投票人は選挙数によって割り振られる。

## 5. 「ハリケーン Sandy は Obama, Romney のどちらに有利」

選挙とは全く最後まで何が起こるか分からない。11月6日の選挙を前に、米国は10月30日にハリケーンSandyに襲われ、23州の約6,000万人の生活が交通遮断、通信不能、停電、浸水などで麻痺している。

危機管理に対応しているObamaの映像がRomnesiaを叫んでいるObamaよりPresidencyの

姿を有権者に訴えることは間違いない。Romneyにしても、危機直後の被害者が多数いる最中に、Obamaを非難するわけにはいかない。しかし、2008年においてObamaに有利となった early voting がSandyの影響でより少なくなっている。一方、Romneyにとっての問題は、このハリケーンによりこれまでのモーメントムがどれだけそがれるかである。

今回の選挙が接戦になる中で、選挙人数が269の同数になるよりも確率が高いのは、2000年のBush-Goreの再現である。すなわち、今回はRomneyが国民の投票数でObamaを上回るが、このハリケーンにより選挙人数においてObamaがRomneyを上回るという可能性がある。現在の国民全体の支持率はRomneyが51%でObamaの46%を上回っている。しかし、ObamaがIowa、Nevada、New Hampshire、Ohio、WisconsinをとるとObamaの獲得する選挙人数は270に達する。

2000年のような状況は、国民に多くの問題を残す。今でも思い出すのが、Florida州の再集計でBushが約6百万票のうち537票のリードで大統領になった時のことである。このようなことが起これば、大統領選出に時間がかかり、Fiscal Cliffの問題が現実化し、米国の不況への可能性が高まる。

米国大統領に誰が選ばれるかは、単に米国経済だけの話ではなく、それは世界の政治状況を変える。良い例は1992年のシニアBushとClintonとの大統領選挙であった。シニアBushは”大統領の仕事は外交だ”との信念に基づき、冷戦後のパラダイムの構築を考えていた。しかし、選挙は国内経済であり、”it's the economy, stupid.”でシニアBushはClintonに敗れた。その後、IT革新により戦後最長の好景気を迎えたが、海外のテログループはClintonの米国を”張子の虎”とみて、テロ活動が活発化したことは事実である。この時のシニアBushにしてみれば、何故IT革新の経済への影響が1年とは言わず、半年でも早くでていれればと思っただろう。

今回の大統領選挙でRomneyにしてみれば、Sandyがもう1週間遅れてくれればと思うようになり、Obamaが心の中で”Thanks Sandy”とつぶやくのか、11月6日になってみなければ分からない。

- ・本レポートは執筆者が情報提供を目的として作成したものであり、当研究所の見解を示すものではありません。
- ・当研究所は、本レポートの正確性、完全性を保証するものではありません。また、本レポートの無断転載を禁じます。
- ・お問い合わせ先：一般財団法人アジア太平洋研究所 [contact@apir.or.jp](mailto:contact@apir.or.jp) 06-6441-0550